

書評

Stephen M. Dickey 著,
Parameters of Slavic Aspect.
A Cognitive Approach.
CSLI Publications, Stanford, 2000. 316 頁

三 谷 恵 子

本書は、スラヴ語動詞の体の意味を「認知的アプローチ」から明らかにしようという意図のもとに構成された著書である。著者の Stephen M. Dickey は、1966 年生まれ、米国インディアナ大学でスラヴ学の学位を取り、現在はヴァージニア大学でスラヴ学科の助教授を勤める若手スラヴ学者で、アスペクト論、動詞意味論を中心としたスラヴ語研究を専門とし、またスラヴ語を対象とした認知言語学的研究の発展をめざして「スラヴ語認知言語学会 (Slavic Cognitive Linguistic Association)」を組織し活動している。他に、20 世紀ボスニア文学を代表する作家セリモヴィッチの長編小説の英語訳も出版している (Dickey & Rakić 1996)。

本書の主題である動詞の体は、間違いなく、スラヴ語学の中で最も注目される研究課題の一つだろう。動詞の語彙的意味と体の相関関係、体が選択される際の統語論的あるいは語用論的制約、体の異なりによって生じる文体的差異、時制やヴォイス、モダリティといった他の文法範疇との相互依存性、あるいは接頭辞および接尾辞付加の派生手段と体の体系の形態論的関連、そして何よりも体にどのような「意味的恒常素」を認めるか、あるいはそもそも「意味的恒常素」を認める必要があるのかという、体の研究が始まって以来常に問われてきた疑問。これらの設題は種々の角度から議論されてきたが、その多くは個別のスラヴ語について論じたものであり、非スラヴ語圏の研究者が単著でほぼスラヴ語全体を検討対象として体の用法と意味を論じたものとなると、比較的近年では Galton (1976) が挙げられる程度であろう。その意味で本書は、Galton 以来の快挙と言ってよいかもしれない。各章は、先行研究の概観から始まり用例の比較検討と解釈、さらなる検討課題の提示という順序で統一されており、読みやすい。用例の大部分は、個別のスラヴ語の文法書や体の先行研究からの引用だが、いくつか (主としてセルビア語の例) は文芸作品から採用されており、本書をそのまま参照文法的に利用することもできるだろう。スラヴ語間の対照は、類似した文脈に

現れる用例の比較、あるいは母語話者の判断に依拠して行われ、これだけで本当に各言語の差が明らかにされるのか、という疑問は残るものの、おおむね手堅い手法といえる。

さて、Galton から四半世紀を経る間に、言語研究には新しい分析の枠組みが提示されてきた。統語論の中心に生成文法を中心とする形式理論の進展があったとすれば、意味の領域では、近年注目を浴びて著しい認知言語学 (Cognitive Linguistics) がある。ラネカーの認知文法 (Langacker 1987; 1991 etc.) やフォコニエのメンタルスペース論 (Fauconnier 1994)、レイコフのメタファー論 (Lakoff 1987) などは日本でもよく知られており、体の研究分野でも、すでに Durst-Andersen (1992) などがある。「認知的アプローチ」と副題された本書もまたその潮流から生じたものであろう。実際、スラヴ語の体の問題が「認知言語学」的にどのように分析されるのか、さらに一般的には、「認知言語学」がスラヴ語の文法分析にどれほど有効な枠組みとなりうるのか、といった点は興味をそそられるところである。しかし本書の分析は、随所でラネカーなどに言及しているものの、「認知言語学」以外の接近法と本質的に異ならないように見受けられる。この点に関連して生じる問題については後述することとし、まずスラヴ語の体の特徴についての著者の主張を概観しておきたい。

複数のスラヴ語を比較した時、我々にもただちに明らかになる体の用法の相違がある。たとえば、ロシア語では歴史的現在に完了体は使用されないが、スロヴェニア語やセルビア/クロアチア/ボスニア語にはそのような制約はない。反復を表す頻度副詞 (たとえばロシア語の часто) と完了体過去形の共起はロシア語ではふつう見られないが、チェコ語やスロヴェニア語では変則的ではない。このようなスラヴ語間に存在する体の用法の違いは一体何に起因しているのだろうか。Dickey はこれを、事象の「概念化 (conceptualization)」の違いとして説明し、そのことを検証するための「パラメータ」として、以下の項目を設定する：習慣反復 (Habitual Expressions 第 2 章)、不完了体の一般事実的意味 (The Imperfective General-Factual 第 3 章)、歴史的現在 (The Historical Present 第 4 章)、現場指示と現場解説 (Running Instructions and Running Commentaries 第 5 章)、発話同時性 (Coincidence 第 6 章)、事象連続における不完了体と始動の意味 (The imperfective in Sequences of Events and other Expressions of Ingressivity 第 7 章)、動詞派生名詞 (Verbal Nouns 第 8 章)。そし

てこれらのパラメータに関し、完了体と不完了体の使用がどのように分布するかを検討した結果、スラヴ語は西群(チェコ, スロヴァキア, スロヴェニア)と東群(東スラヴ語, ブルガリア), そして両者の中間帯(ポーランド, セルビア・クロアチア)の3群に分割される。

たとえば「習慣的反复表現(habitual expressions)」に完了体の現在形と過去形が使用可能かという問題については、次のように論じられる。すなわち、現在時制の場合、事象が Vendler の4分類でいうところの“活動”タイプ(Vendler 1958)であれば、どのスラヴ語でも習慣的反复は不完了体で表されるが、“完成(accomplishment)”と“到達(achievement)”の場合には、西群と東群で完了体の使用可能性に違いが現れる。完成タイプの「(全部)飲む」(「飲む」の完了体)を含む文「毎日彼はウォッカを小グラスに一杯飲む」で比較すると、西群とセルビア・クロアチア語では完了体の使用が可能である:(Cz) *Vypije[ɸ] jednu skleničku vodky denně.* // (Sn) *Vsak dan popije[ɸ] po eden kozarček vodke.* // (SCB) *Svaki dan popije[ɸ] po jednu čašicu votke.* 一方、東群とポーランド語では、この例のように主節で単独に使用される述語の場合、完了体は基本的に使用できない:(Pol) *Codziennie *wypije[ɸ] / wypija[ipɸ] kieliszek wódki.* // (Ru) *Každyj den' on *vyp'et / vypivaet[ipɸ] po odnoj rjumke vodki.* // (Bg) *Toj *izpije[ɸ] / izpiva[ipɸ] čaša vodka vseki den.*

もしすべてのスラヴ語において体の意味が共通であるなら、このように用法上の違いが生じる説明がつかない。そこで Dickey は、西群の完了体は「全体性 totality」の意味を持つのに対し、東群の完了体は「全体性」に加え「時間的特定性 temporal definiteness」を表すと考える。事象の捉え方として、話題とされる状況全体を問題とする「マクロレベル」と、その中の特定の一部を問題とする「ミクロレベル」の二つの可能性を想定すると、マクロレベルでは無制限な反复であっても、ミクロレベルすなわちその中の一回の生起に注目した場合には完結事象として捉えることができる場合がある。西群の完了体はまさにこうした場合のミクロレベルで使用可能であり、個々の事象を一つの「全体」として捉え関連する状況の中に“際立たせ”る機能を持つ。これに対し東群の完了体の「時間的特定性」はまず第一に、マクロレベルでの時間軸上の特定の時点に事象が連結されることを要求する。この「時間的特定性」は実質的に、ボンダルの「時間的局所性 (vremennaja lokalizovannost')」

(TFG 210ff) と同質の概念と考えられるが、Dickey はこの「時間的特定性」が東群の完了体の、事象を「概念化」する本質的要素とみなす。マクロレベルでの反复事象は、時間軸の特定の一点に連結されることはないので、当然、完了体の使用は排除され、反対に不完了体は、「時間的特定性」と背反的な特徴である「時間的不特定性」を持つので、この意味に合致した反复の状況で選択される。さらに、この「時間的不特定性」という意味によって不完了体もまた、ヤコブソン以来の伝統ともなっている欠如的二項対立の無標項としてではなく、完了体の反対項として積極的に特徴付けられることになる。西群の不完了体も東群と同じく「時間的不特定性」の意味を持つのだが、西群と東群の不完了体の「時間的不特定性」には「量的不特定性」(西群)と「質的不特定性」(東群)の違いがあり、前者は「(一つ以上の)不特定の時点に関連づけられる」不特定性、後者は「特定の一時点に関連づけられない」不特定性とされ、この差異は3章の一般的事実的意味の表出において明らかにされることになる。西群と東群の中間に位置するポーランド語とセルビア・クロアチア語は、使用される状況によって、両群のどちらかの特性を強く表すと特徴付けられるのである。

Dickey の指摘する東群と西群の体の意味機能の違いは、たとえば Петрухина (2000) の見方とも部分的に共通し、スラヴ語間の体の違いを考える上で重要な点と言えるだろう。また体を“時間軸”への事象の関連づけとして捉える見方も、それ自体はことさらな新機軸というわけではないが(たとえば Galton 11-12 を参照)、ロシア語の完了体を「時間的特定性」ということばで提示し、同時に不完了体に「時間不特定性」という反対対立的な意味を認めるという視点は、体の研究への一つの貢献と評価したい。

ただしもちろん、このような特徴付けが適切かどうかについては、議論の別れるところであろう。実際、体にどのような特徴を認めるか、言い換えれば、その特徴をどのようなことばで表現するかは、結局のところ、体の意味機能のどの部分に注目しメタ言語的により適切なことばを選択して命名するかの問題であり、先行研究の中でも、研究者の語感の差といってもよいような些末さをも含んで繰り返し議論されてきた課題であると思われる。理想的には、すべての個別的用法をそれによって記述でき、かつ不適切な体の使用を排除するような説明性を含んだ特徴付けが望ましいのだろうが、現実には、どのように定義しようと、即座には納得できないような用法に直面するのが常である。

たとえば、完了体が「全体性」あるいは「時間特定性」という意味をもつことが容認可能であるとしても、そのこととたとえばロシア語で歴史的現在に完了体を使用されないこととの関連性は、それ自体で自明ではない。こうしたことに鑑みれば、体の特徴付けを論じる場合重要なのは、それをどのようなことばで表現するか、というよりはむしろ、一見不透明な意味と用法の関連性をいかに矛盾なく導くか、ということであり、説明の首尾一貫性が議論の有効性を決定するといっても過言ではないだろう。この点に関して本書は「認知的アプローチ」による説明を主張しているのだが、これにはかなり疑問があり、本書の最大の問題点もまさにここにあると考えられる。

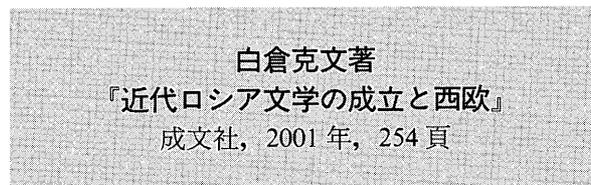
一般に言語分析の方法を選択する時、我々は、言語分析を行うさいに依って立つ基本構想の信頼性と、具体的な分析の手法の有効性の双方を考慮する必要があるだろう。前者は研究者本人の言語観に関わる問題でもあるが、例えば、生成文法に代表される形式言語学では、言語はさしあたり、一つの完成された記号体系として先験的に存在するもの、「理想的な話者の知識」という心的実在として前提され、その根本には、個別の事象がそこから一定の原理によって導き出されるはずの普遍的な規則のセット（普遍文法）があると想定される。従って分析の方法は、（実際には経験的事実から出発する以上、言語研究に真の演繹法というのはあり得ないはずなのだが）“演繹的”であることを標榜せざるを得ず、またその有効性は、抽象化された規則が個別の事例に適用された時に、どれだけ記述妥当性と説明妥当性を持ちうるかという点に鑑みて問われることになるだろう。これに対し認知言語学は、閉じた体系としての言語の存在を前提するのではなく、反対に言語を、外界と心象の間に介在する、常に変化を内在したインターフェイスと捉え、記号系として形成されていくプロセスそのものを“認知的機構”のあり方に参照しながら再構成すると主張している。この主張を信じる限り、確かに認知言語学は、形式理論では説明が困難な多様性や柔軟性といった言語の本質的特徴をより明らかにしてくれる言語研究のあり方であるように見える。形式理論に不自由さや限界を感じる者のみならず、ことばの創造性に関心を抱く多くの者が、認知言語学的な構想に賛同あるいは関心をよせるのは、当然の趨勢といってもいいだろう。本書の著者もまた、言語研究の立場としてそのような認知言語学的視点に賛同する一人であろうし、その主張は随所に述べられている。しかしながら具体的な分析方法の有効性という点になると、問題はまた別である。確かに、ラネ

カーをはじめ先端的な認知言語学者たちは、行動科学や認知心理学などの諸分野から知見を取り込みながら「認知文法」の精密化に努めているだろう。しかし多くの研究の実際はといえば、個別の言語事象に対し「人間の認知機構がこのようだから」という能書きを添えて多分にアドホクな解釈あるいは解説をほどこした程度のもので、実は何の説明的妥当性も備えていないという場合が少なくない。Dicekyの論考も残念ながら、この範囲を出ていないと言わざるを得ない。本書での体の意味付けは、「西群の話者は完了体を用いる場合、事象を“全体”として“概念化”しているから」、あるいは「ロシア語の不完了体は、事象を時間的特定性を持たないものとして“概念化”するので」これこれの場合に使用される、といった具合で与えられるのだが、この程度の解釈が「認知科学」であるのなら、従来の分析の中にも、十分に「認知言語学」的なものはあるといえるだろう。問題は、体の特徴の捉え方そのものや、分析の具体的な進め方一用例を検討し、そこから何らかの範疇的意味を抽出するという一ではなく、分析の結果を“認知”という一語の威力によってあっさり正当化してしまうことの危険性である。いわば“エネルギー”から“エルゴン”に至る心的機構を明らかにするという建て前でありながら実際には“エルゴン”を参照して“エルゴン”自身を解説しているにすぎず、しかもその解説の根拠として“エネルギー”なるものを持ち出すものの、当の“エネルギー”の本質は明らかにされないまま、という危険性。警戒的な見方をすれば、「認知言語学」は、少なくとも現段階では、従来ことばに関心を持つ者たちによって自ずから思惟されてきたことがらを、^{コグニティブスキーマ}“認知的図式”^{ドメイン}“認知的主領域”あるいは^{メンタルマッピング}“心的写像”といった目新しい用語の包装紙でくるんで提示し直しているだけのものであり、このような立場に安住する限り、言語研究に発展は望めないとさえ言えるだろう。

本人からの情報によれば、現在著者は、通時的な面からの体の研究を進めているとのことである。「認知言語学」が真に「認知科学」の一領域となるためには、さまざまな課題があると思われるが、言語の通時態を検討し言語事実を認定するという地道な作業の中からは確かに、“エネルギー”から“エルゴン”への過程を明らかにするための手がかりが見い出されるのかもしれない。そこに著者の研究の新たな可能性を期待したい。

参考文献

- Dickey S. & B. Rakić (tr.) 1996. *Death and the Dervish* by Meša Selimović. Northwestern University Press.
- Durst-Andersen, P. 1992. *Mental Grammar. Russian Aspect and Related Issues*. Columbus, Ohio: Slavica Publishers.
- Fauconnier, G. 1994. *Mental spaces*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (ジル・フォコニエ「メンタル・スペース 自然言語理解の認知インターフェイス」坂原茂 [ほか] 訳, 白水社, 1996年)
- Galton, H. 1976. *The Main Functions of the Slavic Verbal Aspect*. Skoplje.
- Lakoff, G. 1987. *Women, fire and dangerous things*. Chicago: University of Chicago Press.
- (ジョージ・レイコフ「認知意味論 言語から見た人間の心」池上義彦, 河上誓作 他訳, 紀伊国屋書店, 1993年)
- Langacker, R. 1987. *Foundations of cognitive grammar*. Vol. 1. Stanford: Stanford University Press.
- . 1991. *Foundations of cognitive grammar*. Vol. 2. Stanford: Stanford University Press.
- Vendler, Z. 1957. "Verbs and Times." *The philosophical review*, 66. 143-60.
- Петрухина, Е. В. 2000. *Аспектуальные категории глагола в русском языке в сопоставлении с чешским, словацким, польским и болгарским языками*. М.: МГУ.
- ТФГ. 1987. *Теория функциональной грамматики. Введение. Аспектуальность. Временная локализованность*. Таксис. Л.: Наука.
- (みたに けいこ・京都大学)



藤 沼 貴

本書は二部七章から成り立っている。その構成と各章の表題を一覧すれば、著者の意図と本書の特徴は一目瞭然である。

第I部 ロシア作家の西欧文化体験

- 第一章 カラムジンとイギリス — 十八世紀後半のロシアにおける西欧文化受容の一例 —
- 第二章 ジュコフスキーの翻訳活動 — 十九世紀前半のロシアにおける西欧文化受容の一例 —
- 第三章 プーシキンとイギリス文学 — ロシアにおける西欧文化受容の到達点 —
- 第四章 ゴーゴリにおける西欧とロシア — ロシアにおける反西欧感情の顕在化 —

第II部 ロシア・イギリス文化交流の諸相

- 第五章 ロシア・イギリス文化交流の史的展開
- 第六章 バイロンとムアが十九世紀ロシア文学に与えた影響について
- 第七章 ロシアにおけるウォーカー、クレアモント、およびポロー

近代ロシア文学がヨーロッパ文学との深いかかわりの中で形成され、その後ロシア文学がヨーロッパ文学の一構成要素となったことは論をまたない。当然、ロシア人でも、ロシア人以外でも、ロシア文学を研究する者はヨーロッパ文学全体に切実な関心を持たざるをえないし、これまで日本でもそのような問題を主題にした、あるいは、それに触れた研究は相当数生み出されている。その中で本書は、上記の一覧から明らかのように、対象の多様さ、範囲の広さ、取り上げられている時代の長さの点で、わが国では最大級のものである。とくに、第七章で取り上げられているウォーカー、クレアモント、ポローなどは、その名前さえわが国では知られていない。ロシアをふくめて諸外国でも、これほどの規模の研究は本書の著者が再三引用しているM・T・アレクセーエフ、A・クロスのような最高の研究者以外は試みていないのではあるまいか。

この対象の規模の大きさが本書の最大の特徴であり、長所でもある。著者自身が「あとがき」で認めているように、この特徴は精細な研究を阻むという短所をとまなうとはいえ、この点をまず高く評価し、著者の意